文　化　財　学　習　会

ふ る さ と 探 訪

テーマ　岡本から西山崎を歩く

（岡本町平岡、本堯寺、綱敷天満宮、北岡城跡、

本津幹線水路、胴面塚、古川、奈良須池）

日　時　　令和6年6月22日（土）

講　師　　川崎　正視（高松市文化財保護協会　事務局長）

共　催　　高松市文化財保護協会・高松市教育委員会

江戸期の中間(なかつま)郷は岡本村・山崎村・中間村・御厩村からなっていた。そして郷の中心である神社は山崎八幡神社である。明治二十三(一八九〇)年の市町村制による合併で、中間郷は、川岡村(岡本＋川辺郷・川部)、円座村(山崎＋円座郷・円座)、檀紙村(中間・御厩＋飯田郷・檀紙)の三村に分かれてしまった。

現在でも山崎神社域はほぼ中間郷と重なっており、他の川辺郷は川部神社、円座郷は廣旗神社、などとなっている。

山崎八幡神社の秋祭りには、旧中間郷の岡本町、西山崎町、中間町からの多くの獅子組が出て共演・競演で賑わい、奉納している。

西山崎町の名前は新しく、昭和三十一(一九五六)年に高松市に合併した際に、東の川添村にも大字・山崎があったことから、そちらが東山崎町、こちらが西山崎町となった。

○岡本駅とことでん

大正十五(一九二六)年・九十八年前の十二月二十一日、琴平電鉄(株)が栗林公園～滝宮間を開通させる。奈良須池西側の池畔を通り、岡本駅が開業する。軌間一，四三五ミリメートル。

昭和二(一九二七)年三月十五日滝宮～琴平が開通

昭和二(一九二七)年四月二十二日高松(現在の瓦町)～栗林公園が開通

昭和十八年一月高松琴平電鉄が発足

昭和二十三年二月十八日高松(現在の瓦町)～片原町が開通

昭和二十三年十二月二十六日片原町～高松築港(仮駅・元の琴電バス車庫の所)が開通

昭和三十年九月十日高松築港・本駅に移転

ことでん岡本駅(奈良須池畔)

○岡本町平岡（ひらおか）

奈良須池の西側の堂山との間にある狭い土地で、高松と綾川の間の峠になっている所が、岡本町平岡である。江戸時代から、高松から琴平への金毘羅街道が通っている。この道は歴代高松藩主がたびたび通った記録があり、「殿様の道」とも言われていた。また、金毘羅街道は、高松側では仏生山や長尾など大川郡の方への道の分岐があり、南側は千疋や山田への分岐もあった。

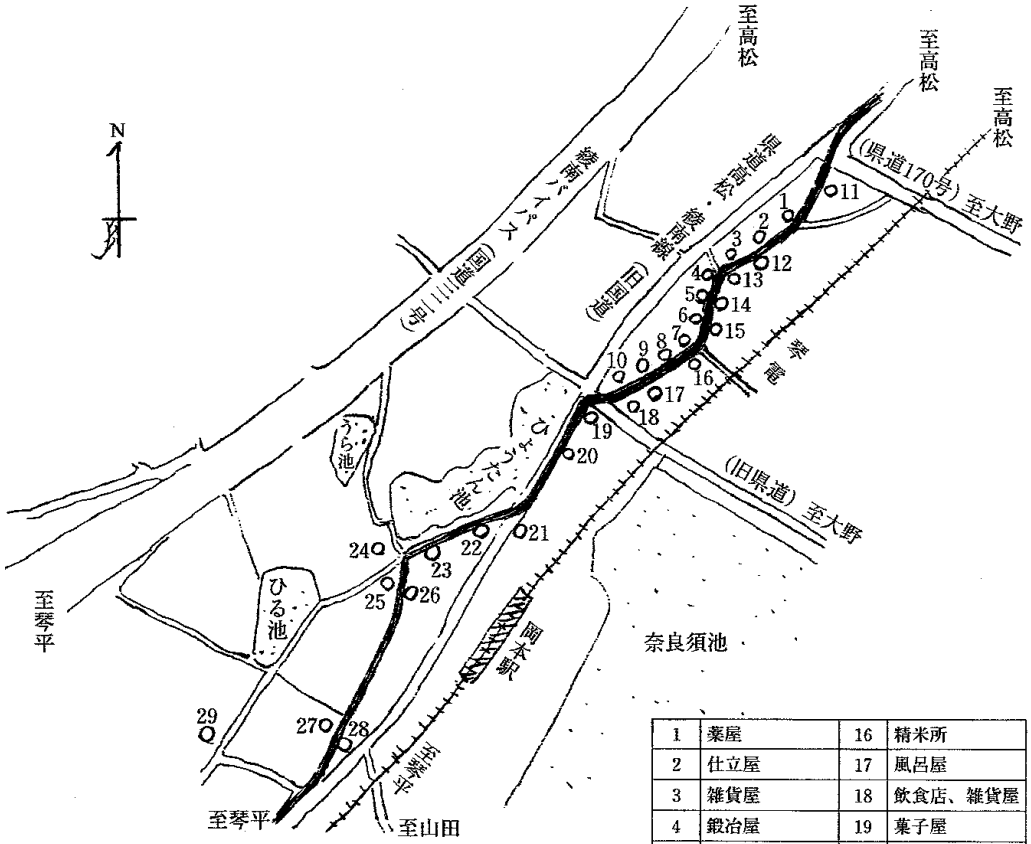
平岡はこのような場所であったことから、江戸時代以降、宿場町として発展し田舎の中の商店街が発達していた。（明治末から大正初期の平岡の商店街の図）

また、戦前には遊園地が開設され花火や菊人形で賑わいました。昭和二十年代には池畔で花火大会が開かれたり、映画館が出来たりしました。

明治三十三（一九〇〇）年に旧国道三十二号は県道として開通した。また、国道三十二号は、綾南バイパスとして平成四（一九九二）年に暫定二車線で開通した。

仏生山への道標

明治末～大正初期の平岡の商店街



1	薬屋	16	精米所
2	仕立屋	17	風呂屋
3	雑貨屋	18	飲食店、雑貨屋
4	鍛冶屋	19	菓子屋
5	料理屋、酒屋	20	建築業
6	精米所	21	宿屋
7	風呂屋	22	料理屋、宿屋
8	酒屋	23	飲食店
9	紺屋（染物屋）	24	呉服屋
10	髪結屋	25	肥料屋
11	医者、薬屋	26	精米所
12	雑貨屋、酒屋	27	酒屋、宿屋
13	酒屋、豆腐屋	28	醤油屋
14	鶏屋	29	宿屋
15	宿屋		

「ふるさと川岡」370頁より

○本堯寺

法華(日蓮)宗本能寺派の寺。天正年間(一五七三～一五九二)に阿野郡南条羽床下村(今の綾川町羽床下)に建立された。宝永～正徳年間(一七〇四～一七一六)頃、現在の地に移転してきた。

境内に、松平頼該(左近)とその一族の墓がある。

・国の登録有形文化財「松平頼該霊廟」

松平頼該(左近)は、八代藩主頼儀の子にあたる。別名・松平左近として江戸後期から幕末維新にかけて学問や芸術文化の分野で才能を発揮した。鳥羽伏見の戦いで高松藩が朝敵とされた際、藩論を官軍への恭順に導き、高松を戦火から救ったといわれている。

霊廟は頼該が亡くなった明治元(一八六八)年、深く信仰していた法華宗の本堯寺に建てられた。瓦葺の木造平屋で建築面積は一六平方メートル。墓のある奥殿と拝殿が相の間でつながれている。複合社殿の武家廟所は珍しいという。

本堯寺

松平頼該(左近)霊廟

○大石大明神（大石神社）

綱敷天満宮を少し下がったところに大石大明神がある。秦久利（はたくり）の一女が後年、白血、長血の病にかかり、臨終の時、この世を去った後は、神を厚く信仰している人の病気を治してあげたいと言ったことから、後世の人がこの地に大石神社を建ててお祀りしたといわれている。俗に大石さんと呼ばれる女神、病気を治す守り神として知られている。

高松市指定・天然記念物の大きなムクノキがある。

大石神社のムクノキ

○綱敷（つなしき）天満宮（山崎綱敷天満神社）

菅原道真（八四五～九〇三、讃岐守八八六～八九〇、大宰府へ九〇一）は、讃岐の国司であったころしばしば当地を訪れ、詩歌の吟遊を楽しんだと伝えられる。任があけ帰京した後、菅原道真が筑紫の大宰府に向かう途中に笠居・香西浦に、親交のあった久利長門守との別れを惜しみ、さらに筑紫に伺った久利長門守に五色の飛梅（唐梅）一顆を与え次のような和歌を与えたと伝わる。

おもいきや　心つくしのはてにきて
昔の人に遭わむとは　（菅原道真）

以来、綱敷天満宮と呼称され、学問の神様と崇（あが）められている。なお、神苑には綱敷公園や筆塚、五色梅、腰掛石などがある。

綱敷天満宮

※正花寺

真言宗仁和寺派の寺で、現在は無住の寺である。
明治の神仏分離以前は、山崎八幡神社、綱敷天満神社の別当寺であった。
・国指定重要文化財「木造菩薩立像」
榧木の一木造。県内最古の奈良時代の末頃の作。
宝蔵庫にあるが、無住であり通常は拝観できない。

※山崎八幡神社

山城国・山崎から勧請したといい、この地の名も山崎となったと言われている。元は東向きであったが、社前を通る際に必ず落馬して怪我をすることから、南向きに変えられた。
現在の氏子は、岡本、西山崎、中間、檀紙に及んでいる。

○北岡城跡

北岡城は秦久利の居城である。秦久利は菅原道真公(八四五～九〇三、讃岐守八八六～八九〇、大宰府へ九〇一)によく仕え、菅公も文学の才に秀でた秦久利を愛し、親交があった。秦久利は老いて一女のみであったので、菅公の族子をもらい後継ぎとし、久利長門守といった。その後、この地方を統治し、香西氏に仕えて、戦国時代に土佐の長宗我部に攻められ、よく戦ったが敗れ下野した。

北岡城跡

○本津（ほんづ）幹線水路

香川県内場池土地改良区の西部幹線水路の一つ。香東川の一の井堰を頭首とする一の井幹線水路（昭和三十一（一九五六）年竣工）に続いて、昭和三十四年に着工、奈良須池の上手から御厩池（昭和三十五・一九六〇年完成）、そして衣掛池（昭和三十九・一九六四年完成）に続く水路。御厩、鬼無、香西へ配水する。〔別紙：香川県内場池土地改良区の西部幹線水路図参照〕

北岡城跡近くの本津幹線水路

○胴面塚（どうめんづか）（胴面さん）

天正年間（一五七三～一五九二）に、阿波三好郷に武将三好清重という人がいた。この人は文字を全く知らなかった。ある日、城主の書状を持って、北岡城に来た。書面には「この者は誰が切り殺しても差し支えない。」という内容であった。三好清重は、帰る途中、城の附近で一刀のもとに首を切り落とされた。この塚は、胴と面と二か所に分けて祀られています。西側が胴、東側が面である。

これを胴面塚と言っている。この塚の霊は、「我は文字を知らなかったので、こんな憂き目にあったのだから、今から我を信ずることの厚い者は、読み書きの道に上達させてやる。」と人に知らせたこの誓願によって今も進学祈願の参拝者が多い。［現地説明板］

◎西山崎には綱敷天満宮と胴面さんの二つの勉学の祈願所がそろっている。是非お参りを。

胴面さん（面塚）

○古川

高松空港の東端の下にある奥谷池に源を発し、東南から北西に、香南町、川岡地区、西山崎、中間、檀紙を経て、御厩町落合で本津川に合流する全長十一・七キロメートルの元々は自然堤防の河川である。上流では、香東川の水を小田池や奈良須池に通す水路の一部にもなっている。また、途中に多くの堰があり、小田奈良須両池などから香東川左岸の平野に農業用水を供給した。弦打幹線、中央幹線、本津幹線ができるまでの長い間（小田池完成から昭和四十四年まで・約三百四十年余）、大きな役割をしていた。

面塚近くの古川・下流に向かって六目山が見える

○奈良須（ならず）池

香東川左岸の高松平野への灌漑施設として、奈良須池の南東一・五キロメートル地点に小田池が、生駒時代の寛永四（一六二七）年に西嶋八兵衛によって築造された。

高松松平藩になっての後、小田池の完成から二十二年後の寛文十（一六七〇）年、山崎村の御蔵奉行・前田与三兵衛によって、小さな四つの池があった谷筋に、自然の小さな中山を利用して東西にダム状の堤防を築いた奈良須池が完成した。

現在の規模　貯水量一四四・七万立方メートル。堤長五二〇メートル。堤高十三・二メートル。

参考・内場ダムの貯水量八一七・五万立方メートル。

愛称・奈良須四郎（満濃太郎・神内次郎・三谷三郎）

このことにより、小田奈良須両池を水源とする水利の共同体（小田奈良須両池掛り・小田奈良須両池水利組合・小田奈良須両池土地改良区）ができたのである。

奈良須池・東堤防から南を望む

① 岡本三十番神と池辺神社・日本の信仰と神道の関係

三十番神とは、一か月三十日の毎日、法華経を守護する神仏混合の信仰。木太町にも遍路道沿いに三十番神がある。岡本三十番神は天保十(一八三九)年に奈良須池畔の中山に建てられた。明治維新の神仏分離で、明治二(一八六九)年に御神体は本堯寺に移され、社殿は浄土真宗の専有となり後に今の真光寺となった。明治四十五(一九一二)年に中山の旧地の西隣に三十番神が復元復活した。昭和五(一九三〇)年、奈良須池西堤防が漏水で決壊しそうになった時、三十番神で祈祷を行い、難を免れたことで記念塔が建立された。昭和十六(一九四一)年、大東亜戦争の際に神社神道と軍部の圧力で再びご神体が本堯寺に移されて廃止となり、山崎八幡神社の末社・池辺神社と改められた。平成三(一九九一)年新しく社殿が改修され旧神社からご神体が移された。

池辺神社

② ユルとサンザイ

奈良須池には西から、西堤防に「丈(たけ)ユル」「西ユル」、東堤防に「本ユル」「岡本ユル」と四つのユルがある。

「丈ユル」は岡本西部の高い所に、「西ユル」は岡本・西山崎の高い所に、「本ユル」は本津幹線、古川、中央幹線に繋がり川部を除くほぼすべての地区へ配水する。「岡本ユル」は少し高い位置にあり、耳塚山の裾をまいて岡本の東部へ配水する。

旱魃が厳しく池の水が減ったときに、「サンザイ」といって池尻近くの田んぼにのみ配水するという水利慣行があった。種籾の確保のためのルールだったと考えられる。

③ 導水路、配水路の変遷

導水路

・一ノ井堰～奈良須池、二ノ井堰～小田池・・・江戸時代から昭和二十年代まで

・内場池(ダム)の完成(昭和二十八(一九五三)年)

・コンクリート造り一の井堰、一の井幹線水路の完成(昭和三十一(一九五六)年)

・香川用水の通水(昭和五十(一九七五)年)

配水路

・古川等を経由する配水から→弦打幹線水路、中央幹線水路、本津幹線水路を主に使った配水(昭和四十四(一九六九)年)〔別紙:小田奈良須両池配水系統図参照〕

・香川用水の通水(昭和五十(一九七五)年)

参考文献

ふるさと川岡　平成十三年

香東川と暮らし　平成二十二年

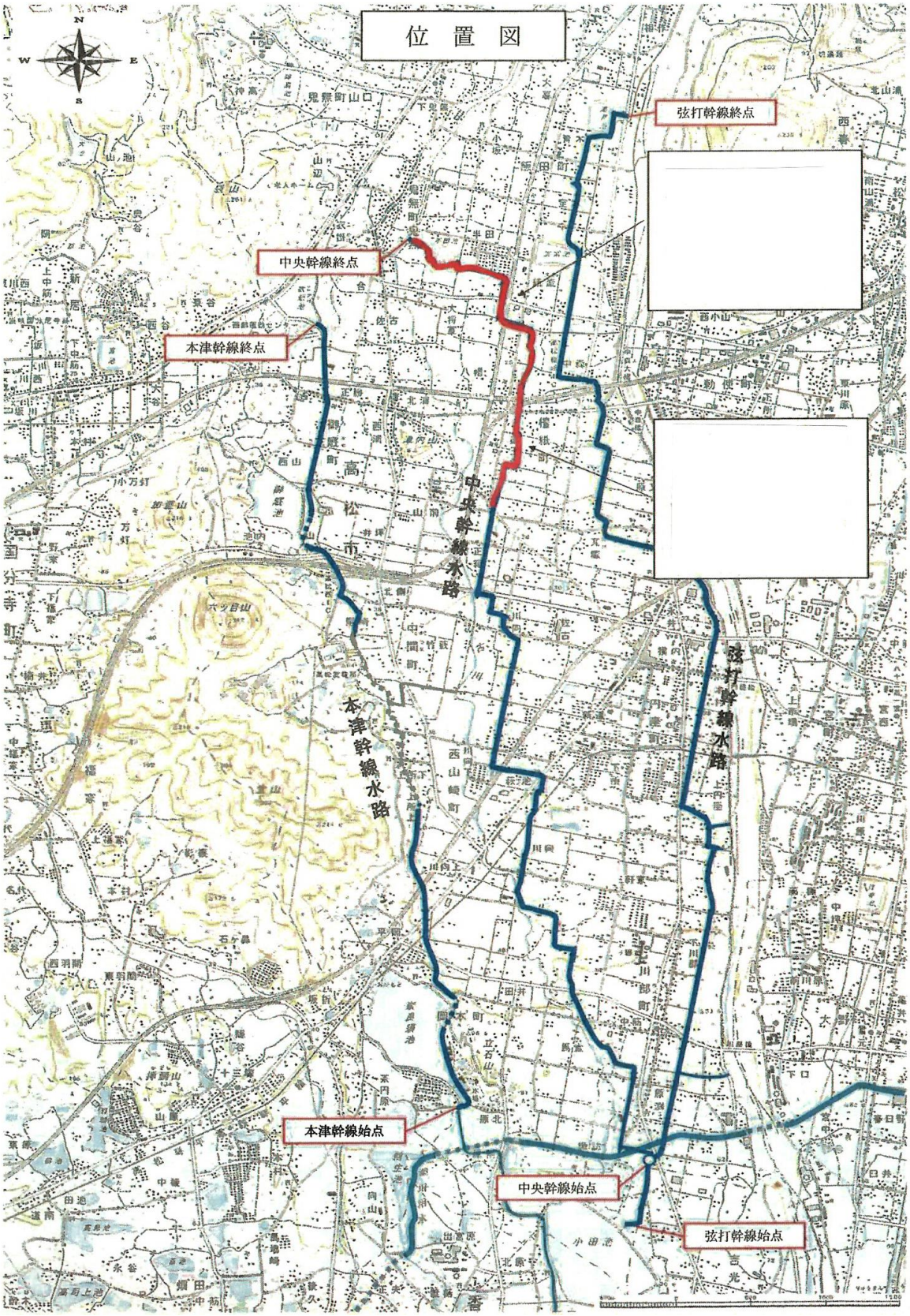
琴電・古典電車の楽園　平成十五年

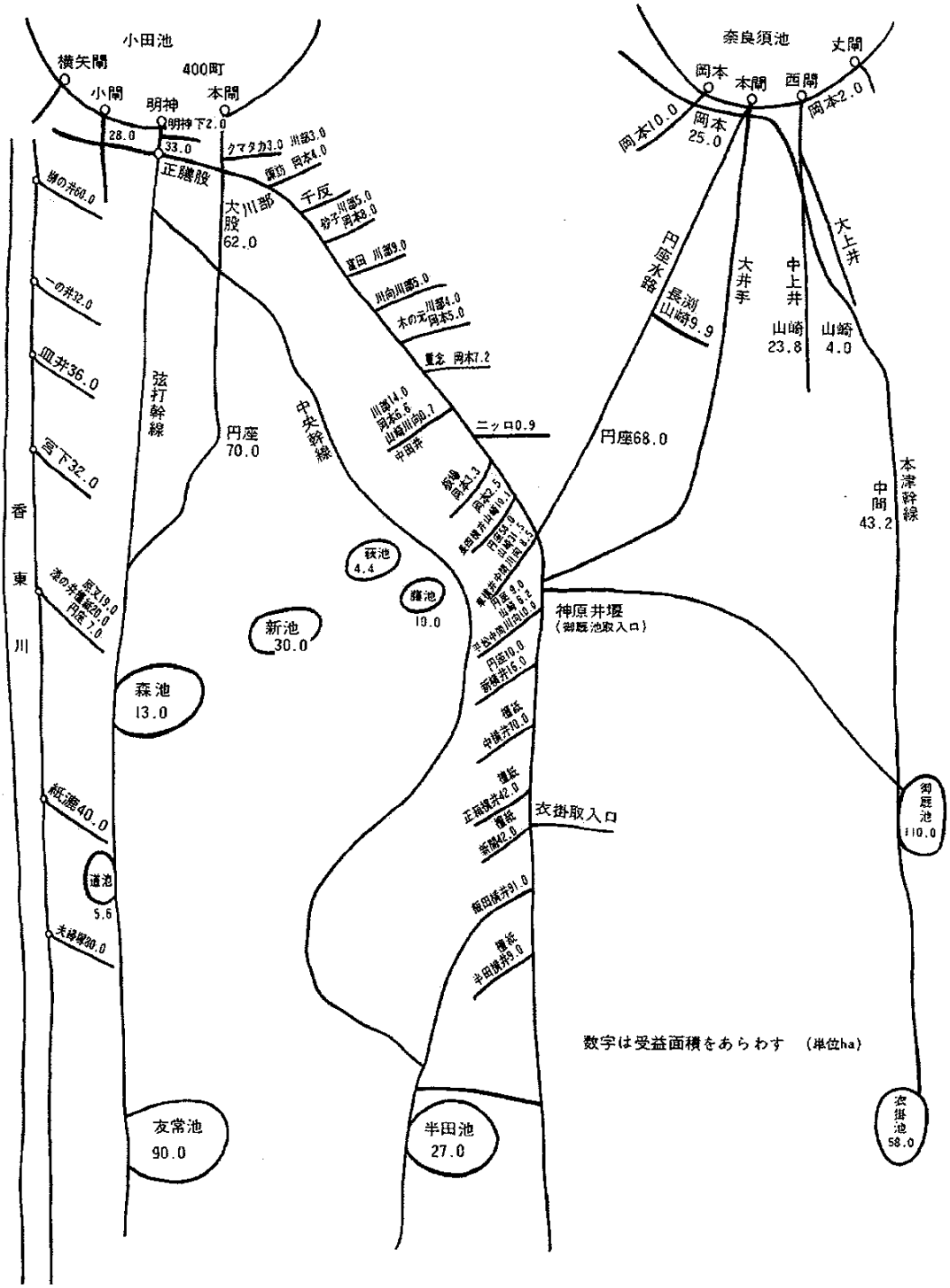
香川県内場池土地改良区史・本編　平成二十七年

資料提供

小田奈良須両池土地改良区

香川県内場池土地改良区の西部幹線水路



小田奈良須両池配水系統図（昭和46年6月19日作成）

[昭和44年に完成した弦打・中央幹線を加筆したもので、それ以前の水系がよく分かる。]